

「分析支援プログラム」を活用した効果的な取組事例(中学校)

【越谷市教育委員会】

- 1 学校／教科 中学校／国語
- 2 ねらい

「分析プログラム」を活用して県学習状況調査の結果を分析することで、本校の課題を明確にし、指導法改善に生かすことで、生徒の確かな学力の向上を目指す。

- 3 取組内容

(1) 平成24年度県学習状況調査(国語科)の課題と改善の手立て

【国語】		設問別・観点別正答率									
学習指導要領の内容	問題番号	通番	評価の観点					記述式	県正答率	本校正答率	
			1	2	3	4	5				
A 1年(1)イ	1	(1) 1	○					91.0	91.6		
A 1年(1)エ		(2) 2	○					91.9	94.4		
A 1年(1)イ		(3) 3	○					71.6	79.9		
伝 1年(1)ウ(イ)	2	(1) 4				○		96.0	97.2		
伝 1年(1)ウ(イ)		(2) 5				○		78.8	83.8		
伝 1年(1)ウ(ア)	3	(1) 6				○	☆	89.7	88.8		
伝 1年(1)ウ(ア)		(2) 7				○	☆	97.6	98.9		
伝 1年(1)イ(イ)	4	8	○			○	☆	81.6	83.2		
伝 1年(1)イ(イ)	5	9	○			○	☆	86.9	93.3		
B 1年(1)ア	6	(1) 10			○			86.5	94.4		
B 1年(1)ウ		(2) 11			○		☆	57.8	72.1		
C 1年(1)ウ	7	(1) 12				○	☆	56.0	60.3		
C 1年(1)ウ		(2) 13				○		74.8	79.9		
C 1年(1)ア		(3) 14				○		91.7	96.1		
C 1年(1)ウ		(4) 15				○		52.6	54.2		
C 1年(1)エ	8	(1) 16				○		86.5	89.9		
C 1年(1)ア		(2) 17				○	☆	52.2	63.1		
C 1年(1)エ		(3) 18				○	☆	68.6	72.6		
C 1年(1)イ		(4) 19				○		74.4	80.4		
伝 1年(1)ア(ア)	9	(1) 20				○	☆	49.9	68.2		
伝 1年(1)ア(ア)		(2) 21	○				○	57.5	68.7		

この項目のみ県正答率を下回った。漢字の読みについては、計画的、継続的な指導と繰り返しの学習が必要である。現行の「漢字コンテスト」実施(年3回)への指導、取組の強化を対策としていく。

県正答率は上回っているものの、校内テスト等においても同種問題の正答率に課題が見られる。(解答を導くまでの条件が複数→[どのような印象か、一文を探す、はじめの五字を探す]であると誤答が多い傾向がある。) 答案返却時に丁寧な指導を重ねていく。

県正答率は上回っているものの、校内テスト等においても同種問題の正答率に課題が見られる。(解答の条件→[あてはまらないものを選ぶ]をよく確認せず答える傾向がある。問題の主旨を正確に読み取ることが課題・心情をとらえる→「主人公の思いをとらえる」を不得手とする傾向がある。) よって、この部分を特に授業で丁寧に取り組む。

(2) その他、国語科のポイントとなる問題に対する取組

●「5 日常よく使われる敬語を正しく使うことができる」について

校内研修テーマ「言語活動の充実」と併せ、生徒を取り巻く言語環境の整備について力を入れた。特に生徒の話し言葉や発表原稿や掲示物作成を含めた書き言葉への指導を重ね、「敬語」についても、国語の単元で扱うだけというような知識面の理解だけに終わることのないよう、日頃から校内の言語環境を整えていく中で指導することを意識し特に、以下の3点に取り組んだ。

- ① 放送広報委員会による校内放送の充実と工夫（校内放送では必ず読み原稿を準備する。文法的に正しい言葉を美しく伝える。声の大きさ、速さにも気をつける。）校内掲示の充実と工夫（生徒の手による掲示物の作成を促す。よい文章に触れる機会を作る。）
- ② 学級での指導（帰りの会での「美しい日本語」を題材としたスピーチの実施、学活における話し合い活動への具体的な指導）
- ③ 話し言葉の指導（朝会での生徒感想発表・職員室に出入りする時の言葉）特に、職員室の出入りについては、大きな声ではっきりと、「〇〇です。□□先生はいらっしゃいますか。」「失礼します。」など述べることにしている。声の大きさ、速さ、言い間違いはその都度指導している。

これら3点は、敬語を含め、状況に応じた言葉遣いを学習する日々の機会となっている。

●「6-2 文章の構成を工夫し、自分の考えをわかりやすく記述できる」について

記述式の問題に抵抗感を少なくして取り組ませることに重点を置いている。授業では以下の3点を指導している。

- ① どのような課題であっても白紙で提出しない。チャレンジしてみる。思いや考えを書き言葉にすることをためらわない。
- ② 友達の意見や自分の考えや思考過程など自己表現を生かしたノートづくりをする。
- ③ 記述式の解答には型がある。主述の関係を明確にし、特に文末表現（～であること、など）に気をつける。日々の授業の中で、課題に取り組む際にその都度指導を重ねる。

また、本に親しむことで語彙力が増える、文章を読み取る力がつく、表現力が増す、などの効果が期待されており、今年度から全校で朝読書への取組を始めたこと、図書委員や図書ボランティアによる図書室の充実や図書だよりを通して読書活動への啓発がなされたこと、が成果として表れている。

- 「9－（1） 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めることができる」
- 「9－（2） 古典の文章の展開に即して内容をとらえることができる」について

本校は、古典を学習する際、特に音読の指導を徹底している。歴史的仮名遣いを学習したのち、正しく発音し、古典独特のリズムを意識した読み方、について音読カードを活用しての取組を進めている。大きな声ではっきりと、適度な速さで読むことにより、仮名遣いの定着、内容の理解が進むと考えている。

また、古典作品を扱う授業の導入として、1年生では百人一首を用いている。100首完全暗唱、歌の理解を取り入れた掲示物（「私の好きな一首」）作成に取り組んでいる。さらに、1年生から3年生まで学年ごとに「校内百人一首大会」を開催して、個人戦・学級対抗戦で優秀者を表彰をしている。何度も繰り返し、視覚的に聴覚的に古典に親しませている。興味関心を高めるためにも、よい作品を繰り返し味わわせている。

4 成果と今後の課題

- ◎「各教科」の分析は教科会、「生徒質問紙調査」の分析は校内研修推進委員会で行い、本校生徒の実態を明確にすることに努め、解決策に取り組んだ。
- ◎教科の分析においては、教科として全校的な視野で行うことを共通理解し、教科会を充実させ、本校生徒の日常の学習指導や授業での取組を分析した。
- ◎「生徒質問紙調査」分析においては、前年度との比較を重ね、それぞれの学年の日頃の様子に照らし合わせ、学年間の違いに目を向けるようにした。
- ◎単なる教科の正答率を追うだけではなく、その背景に学校や家庭での過ごし方、または生徒の感情があることに着目した。「生徒質問紙調査」結果から、生徒の実態、家庭の様子を把握し、言語活動を充実させる授業づくりや意欲を高めるための工夫に生かした。
- ◎生徒に、学校の授業で「わかる喜び」を感じさせるために、発表、話し合い、ノートに書く、調べる学習等の時間の確保及び質の向上に努めた。
- ◎どの教科においても効果的なノートづくり、評価カードを通じた学習指導の目標として実践した。
- △分析プログラムをさらに効果的に活用し、課題解決のための具体策の立案と、学校全体で取り組んでいくことを今後も継続させる。
- △さらに、言語活動を充実させる授業づくりを継続させ、生徒に達成感、学校生活の充実感を味わわせるとともに、「みんなの前で意見をはっきり言える」「勉強は大切だ」と答える生徒を増やしていくことも課題である。